

19 . 女王の激怒 (マリンドクウエ)

昔々、マリンドクウエの地に、美しく強い兵士の女王、マリア・マリンドゥグが住んでいました。彼女の黒檀のような黒い髪は、滝のようにくんだり、伝統的な天使のような美しい顔で、彼女のほっそりして、しかしたくましい体に、完全に釣り合いがとれていました。そして、彼女の美しさは、彼女の勇敢で、力のある性格に合っていました。彼女は戦場でどんな兵士とも対等に戦い、彼女の激しさは、どんな敵も負かすことができました。彼女の美しさと力は、その地全体にわたって伝説的になっていました。

彼女の性格の全てが、マリアを力ある女王として、彼女はその領土と人々を力と正義で支配しました。彼女の決意を秘めた指導力によって、彼女の王国は強くなり、また繁栄しました。彼女は王家の家臣の全てに、愛され、尊敬されていました。しかしマリア・マリンドゥグは、また、彼女の厳しい法律に従わない者はだれでも、平気で大変無慈悲に、それに対処しました。

彼女の強さ、決意の固さ、迫力の評判は、彼女を大変悲しい、孤独な女性にもしました。マリアは、物質的な財産は、ほしいものはすべて持っていましたが、彼女の生活で何か欠けているものがありました。彼女は、自分の生活と愛を、彼女の信頼できる男性と分かち合うことを切望していました。しかし、実は、多くの男性は、マリア・マリンドゥグの強さ、彼女の迫力そして伝説的な評判に、おびえさせられていたのです。彼らは彼女に近づいて、結婚を申し込むことを恐れていたのです。

だから、マリア・マリンドゥグは、夜を一人で、彼女の贅沢な宮殿で過ごす運命になっていたのです。

ある日、恐ろしい、たいへんな嵐が、ほえるような風と、激しい雨を伴って、土地と海を荒らしまわりました。それはとても強かったので、土地を揺さぶり、木を根こそぎにし、マッチ棒のように横に放り出しました。海は怒りだしてその波を暴力的に陸に打ちつけました。荒々しい嵐は、何日も暴れて、王国を暗闇と恐れに押し込みました。人びとは、何をすることが彼らの神々を怒らせたのだろうか、と考えました。

たいへんな嵐がおさまって、輝く太陽が東から昇り、すべてのものに口づけし、暖かな、安心させるような光で、それに触りました。

嵐がおさまるとほとんど同時に、平和な静けさが、土地に取り戻され、浜の人びとは、三隻の立派な船が遠くに、船首を彼らの浜に向けているのに気付きました。これらの船は、全体を金と高価な宝石で飾られ、暖かな陽光に輝いていました。

女王はただちに、その近づいてきた訪問者たちのことを知らされました。彼女は、これらの不思議な船が侵略してきた軍隊か、潜在的な友人なのか、知る方法はありませんでした。両方の事態に対処するために、マリア・マリンドゥグは、兵士たちに警戒し、必要なら戦えるように待機しておくように命じました。しかし、彼女は料理人に、豪華なごちそうも用意するように命じました。よそから来た人々が平和の訪問者だった場合のためです。

女王は、宮殿警護の騎馬隊を先遣隊にして浜に送り、彼女に代わって訪問者に語らせ、彼らの訪問の目的を知るようにさせました。

その頃までには、何百もの人びとが、湾の、岸から何百ヤードか沖に停泊している、変わった素晴らしい船を見るために浜に集まっていた。彼らは、3隻の手漕ぎボートが船から岸にやってくるのを見て、うっとりしていました。

三隻の手漕ぎボートは浜に着きました。それぞれのボートでは、胸を裸にした、たくましい漕ぎ手の濃い色は別として、他の国の堂々とした君主が立って、日光を受けて輝いた貴重な宝石によって覆われた赤、栗色、金、および青の美しいローブを着ていました。それぞれの君主は、濃い黄金の肌と素晴らしい金と銀の王冠を頭につけ、それには輝く真珠、ルビー、ダイヤモンド、ルビーがはめ込まれていました。

女王の宮殿警護の長は、三人の外国の王室の人物に近づき、何の仕事でこの地に来たのか、尋ねました。

堂々とした訪問者のひとりが、歩み出て言いました。「私たちは、ムー帝国から来た、最も強い王たちです。何ヶ月も、たくさんの海を越えて、空の太陽を追って、旅をしてきました。ここに来て、あなたの力強い女王にお会いするためです。彼女の力と美しさは私たちの地で伝説になり、多くの詩や物語、また歌になっています。私たちは、あなたの女王にたくさんの贈り物をして、私たちのひとりが彼女に結婚を申し込む希望を持って、ここに来ました。」

フィリピンの神話と伝説

宮殿護衛の長は、三人の王が、武器を携えていないのを見て、彼らは本当に、平和のために来たことを信じました。彼は、王たちの前でおじぎをしました。「私は、私たちの力強い女王マリア・マリンドィグ陛下に代わって、私たちの海岸に歓迎いたします。」彼は立ち上がり、彼の兵士たちに王室訪問者に三頭の馬を連れてくるように命じました。「どうぞ、私に従ってください。安全に宮殿に行けるように、護衛いたします。宮殿では、女王が皆さんをお迎えするために待っております。」

宮殿護衛の長は、三人の王を宮殿に導きました。彼らには何十という黒っぽい奴隷の漕ぎ手が、ボートから、肩にかついで、女王への贈り物を運んで付いてきました。

宮殿では、女王は金の王座に座り、金と銀の糸で縫われた最上の服をまとい、真珠の王冠を着けていました。彼女は三人の王の訪問を受け、彼らは彼女の前でおじぎをし、贈り物の箱には、高価な金、銀、と宝石を満たしていました。「あなた方は、私の地と私の宮殿への最高のお客様です。」と彼女は言いました。「私と私の臣下を代表して、あなた方皆さんと友好関係を結びます。」

王たちの一人が立ち上がり、ほっそりした女王の彫刻のような美しさに畏敬の念を持って挨拶しました。「あなたの寛大さに大変感謝します。力強い女王様、あなたは美しさと力を併せ持っております。私はヒラガの王カリです。」彼は右に向いて、「私の右手におられるのは、シランガンの王パンギコグ。」彼は左に向いて、「私の左手におられるのは、カティムカンの王マンガ。」彼は女王の方を振り返って、女王は宮廷で三人のすてきな男性に会えて嬉しく思っていました。「私たちは贈り物を持ってきました。」王カリは続けて、「しかし、私たちの特別のここに来た理由は、私たちのひとりがあなたの夫になる願いを持っているからです。」

女王は大変喜びました。ついに、誰かが、勇気を出して、彼女に近づき、結婚を申し込むことになったからです。そして、彼女はすでに、堂々とした訪問者の誰を彼女の夫にしたいか、決めていました。素敵で、教養のある王カリが彼女の選択でした。彼女はこの考えを、差し当たり、自分の中だけで持っていました。

女王マリンドィグは彼女の王座から立ち上がり、訪問者に、彼女に続いてゆくように命じて、宴会部屋に案内し、そこでは彼らのためにたくさんのご馳走が用意されていました。三人の王は女王に

ついて、王座の部屋から出て、彼女が彼らの先を歩いている時、彼女の優雅さと美しさを賞賛しました。

三人の王様は、宴会部屋の魅惑的な、贅沢な、よだれの垂れる料理に感動し、何時間も食事をし、彼らの美しい宮廷のホストと話しました。

ついに、女王は立って、彼女の三人の特別の訪問者に挨拶しました。「今日は本当に私たちの王国にとって偉大な日でした。」と彼女は言いました。「そして、あなたがた三人が私を妻にする価値があると考えてくださって、本当に名誉に思います。女王はたとえ力があっても、その横に彼女を助け愛する男性がまだ必要です。そのような愛のある、誠実な協力によってのみ、私たちの地は力付けられます。」そして彼女は長い深呼吸をして、彼女の心臓は少し鼓動が早まり、彼女は宣言しました。「そして、私は既に、私の夫にしたい人を決めました。」彼女は笑っている王カリを見て、彼女の細い手を伸ばしました。「私は王カリを私の夫にします。」

しかし、三人の王たちは、お互い当惑して顔を見合わせました。王マンガが立って、女王に挨拶しました。「すみません、女王様」彼は言って、頭を下げました。「しかし、それは不可能です。私たちの帝国の法によると、それは私たちの帝国の創始者、皇帝ナウナによって定められたものですが、女性は夫になる者を選ぶことはできないのです。」

女王は、王マンガの発言で、撤回させられ、抗議しました。「ここは、私の王国であり、私が法律です。」

王カリは、立ち上がって、尊敬の念をこめて美しい女王の前でおじぎをしました。彼は、彼女の暖かく微笑み、そして言いました。「陛下、あなたが、友のふたり以上に私を選ぼうと、見てくださっていたことで、私は本当に誇らしく、私の心は喜びに満たされています。しかし、私はどこに住んでもいいのですが、私たちの帝国の法律に従わないわけにはいきません。」そして、彼は座りました。

女王は、将来の夫を選ぶことができないことに少し憤慨しました。「あなた方の法律は、何か間違っています。」と彼女は言いました。「人の希望や感情を尊重しない。それは何という法律なのでしょう。」

王カリは、返事を言いました。「しかし、それが

フィリピンの神話と伝説

私たちの地の法であり、私たちの民は従わなければならないのです。」と彼は言いました。

女王は落胆してため息をつきました。「それでは、決定はどのようになされるのですか？」と彼女は聞きました。

王パンギコグが立ち上がり、女王に言いました。「陛下、」と彼は言い、「私たち三人の間で、力と技術と速さの競争をするはずで、勝利者が、あなたに結婚を申し込むのです。」

女王はまたため息をつきました。今回は、あきらめのため息でした。彼女はこれが彼女の夫を選ぶ唯一の方法であることと、そしてその三人の王は帝国の法律に逆らおうとしないことのためです。「よろしい。」彼女は同意しました。彼女の結婚の運命が単なる競争で決まることに彼女は面白くありませんでした。「明日の夜明け、あなたがた三人は、あなた方の船を使って海のレースに参加するのです。決勝点を最初にくぐった船の持ち主である王が、私に結婚を申し込む権利を手に入れます。」

三人の王は、女王の提案を承認してうなずき、彼女の賢く公正な決断に感謝しました。

夜遅く、三人の王が、大切な翌朝のレースの準備に、宮殿で眠っている間に、女王は寝室に行きました。そこで、彼女は秘密の通路の鍵をあけて、彼女だけの神殿に向かいました。

神殿の中でひとり、焼いた香の香りに溢れる中、女王は、冷たい石の床にひれ伏して、神々に情熱的な嘆願をしました。「どうぞ、私のことを聞いてください。」彼女は祈りました。「明日の朝、レースが私の運命を、私の心の運命、私の王国の運命を決めます。王カイが私の唯一の愛する人で、結婚したい人です。もし、彼がレースに負けたら、私は愛していない人と結婚させられます。そして、私の王国をよく治められるかどうかわかりません。神々にお願いします。優れたスピードと力を王カリの船に与えて、彼がレースに勝ち、彼のこれからの生涯を私の横にいさせてください。この願いを神様に、私自身のためだけでなく、私の民の平和と将来の幸福のためにお聞きください。」

そして女王は立ち上がり、彼女の寝室に帰りました。神々が彼女の必死の嘆願を聞いてくださると信じながら。

次の朝、太陽が水平線の上に上がった時、何千もの人びとが、若者も老人も、美しい女王も含めて、

宮殿護衛に囲まれて、浜の上で、三人の王の、彼らの力強い王国の運命を決めるレースが始まるのを待っていました。

女王の心臓は、レースが始まるのを知らせる合図のように、激しく打っていました。彼女とすべての民は、カイ、マンガ、パンギコグの王たちをそれぞれ乗せている三隻の王室の船を見て、あげられている色鮮やかな帆や水平線を横切っている速さに注目していました。

レースは数時間続き、みんなは浜から、ハラハラするような期待をもって、見ていました。レースが始まってから、王マンガの船がリードして、それに続くのが、王パンギコグの船。王カリの船は、レースを通じて最後に残されていました。そして、決勝点が近づいて、王カリは他の2隻の船に追いつけそうもありませんでした。

女王マリア・マリディグは、レースを見ていられませんでした。レースが始まってから、彼女は、神々が彼女の祈りに応えて、愛する王カリの船にスピードを与えるように祈り続けていました。しかし、神々が別の考えを持っていたことは明らかです。

王マンガの船は決勝点を最初に通過して、続いて、王パンギコグの船。悲しいことに、王カリの船は最後になりました。

女王は、神々が彼女を落ち込ませ、ついに夫を見つめることができ幸せになるのではなく、災のように怒りによって、目は燃え上がりました。彼女は宮廷護衛たちを押しつけ、彼女の堂々とした黒い馬にまたがって、全速力で、浜から宮殿まで、ずっと泣きながら走りました。

怒り、すすり泣いた女王は、怒鳴って、彼女の個人的な神殿に入り、神々に叫びました。「どうしてそんなむごいことができるのですか。」彼女は、悲鳴をあげました。「私はあなたを守護者と思っていました。いかにして、好きではない男と結婚させるのですか。思いやりを持っていない人に心と体を与えるくらいなら、死んだ方がましです。私は民に対して、悪い女王だったのでしょうか。私の王国を救うために、勇気を持って戦わなかったのでしょうか。この平和で繁栄した土地のためにまじめに働かなかったのでしょうか。どうして、あなたはこれを私に行ったのですか。」

しかし、神々からは何の印もなく、ただ、女王のすすり泣きが、不気味なほどに神殿の石の床の周りにこだましていました。

フィリピンの神話と伝説

女王は神殿の中央にひざまずいて、床に握りこぶしを強く打ちました。「どうぞ、私の祈りを聞いてください。愛していない人とこれからの生涯を過ごすより、死んだ方がましです。」彼女は神々に叫びました。しかし、女王がもう一度床を握りこぶしで強く打つと、床は砕け始め、彼女の握りこぶしの下に割れてゆきました。すると神殿全体が揺れて、震え始めました。女王は立とうとしましたが、揺れた神殿は彼女を床に倒れさせました。すると神殿の柱と壁は、砕け、割けて、重い石の天井が、身動きの取れない女王の上に、大きな音を立てて、落ちました。

浜の人々は、恐怖と疑念を持って見ました。彼らの愛する女王は、遠方で、つぶれて、死にました。すると彼らの周りの全ての地面は揺れ始めました。空は明るい青から、恐ろしい黒に、そして激しい風が吹き始めました。雷と稲妻が、暗い空を引き裂き、重い雨が、地面を鞭打ちました。海は怒ってうねり、波立ちました。母たちは、叫んでいる子どもたちを慰め、父たちは、怖がっている妻たちを慰めました。それは、地面が揺れ、海が大きな波を作って、陸地を砕いたからです。人びとは逃げようとしたのですが、凶暴な嵐によって、地面に投げ出されてしまったのです。

怒りの海は、巨大な濃い波が三人の王の船を壊し、船は凶暴な水の表面から真下に消えてゆきました。

しかし、それが起こるとすぐに、凶暴な嵐は静まりました。地面は揺れが止まり、雨も落ちるのがやみ、風も吹くのが止まり、雷は鳴り止み、稲妻も光るのをやめ、海もうねりが止まって、空の黒い雲は消えました。

明るい青空に太陽がもう一度現れ、水につかっていた土地が、暖かな、安心させるような光の中で現れると、人々は女王の宮殿が建っていた場所に、美しい山が立っているのを見て、びっくりしました。海を見ると、彼らは、前日三人の王の船がいたところに、三つの小さな島があるのを見ました。

強く、美しい、すばらしい女王の記念に、彼らは山を、マリア・マリンドィグと名づけました。そして三つの小さな島を、三人の死んだ王たちにちなみ、マンガ、パンギコグ、カリと名づけました。

不幸なことに、スペイン人が16世紀にフィリピンを侵略した時、マリンドゥエの人びとの意志に反して、三つの島の名前を変えました。